

総武戦隊奉仕レンジャー

もよぶ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

思いつきで書いたものですので内容が色々酷いです。

総武戦隊奉仕レンジャー

「先輩！ 雪乃先輩と結衣先輩ばかりずるいです！」

最近奉仕部へ居座つている一色が雪ノ下と由比ヶ浜が手首につけていたシユシユについて比企谷からのプレゼントということを知つてしまい、抗議の声を上げる。

「なんでかわいい後輩である私にくれないんですかー？ おかしくないですか？」

「おかしいのはお前の頭だろう、何故お前にくれてやらにやいかんだ？ 大体お前は俺からもらつてもうれしくないだろ、葉山んどこ行つて来いよ」

「えーいいじゃないですかー、雪乃先輩と結衣先輩に上げてるんだから2つでも3つでも大して変わらないじゃないですかー、私にもくださいよー」

そう言いつつ一色は比企谷の腕に抱き着いて駄々をこねる

結局色々揉めた末一色用に同じデザインのオレンジ色のシユシユを買い与えることになつた。

次の日の部活の時間何故かまたプロット程度の物を持ち込んでコテンパにされた材木座が全員がシユシユを手首につけているところを見て、比企谷へこつそり耳打ちする

「八幡、あの女子共がつけてるアレななんかこう三人がそれつけてると戦隊物っぽくないか？」

「うーん、実は俺もちよつとだけそう思つてしまつことがあるな、雪ノ下はピンクだけどレッドっぽくてリーダーつて感じだし由比ヶ浜は2番手でブルー、一色はイエローでしつくりくるしな」

「やつぱりあの会長殿はカレー好きか？」

「ブフフ笑わせるな」

つい吹き出す比企谷だがそれに気が付かぬ女子たちではなかつた
「さつきから『そ、そと気持ち悪いわ、それにその声の大きさでひそ
ひそ話は無理があるのでなくて？、さて比企谷くん戦隊物とは何か
しら？』」

雪ノ下が見る物すべてを凍らせるような視線で比企谷に詰め寄る
「あー我は用事があるのでな！では八幡！生きてたらまた会おうぞ
！」

「あ！中二！」

由比ヶ浜の制止も聞かず材木座は一目散に逃げ出す、残つたのは
3人の女子に囲まれた比企谷だけとなつた。

「あー何とか戦隊何レンジャーフていうやつですか？女の子になんか
失礼ですよ先輩」

ちよつと知つていた一色は不満そうに比企谷に言うが

「ま、まーそれだけ似合つてることだ、プレゼントした俺も鼻
が高い！うむ！これにて一件落着だな！さて俺は今からアレがアレ
して何だから帰るな、それじやまた明日！」

と比企谷も帰ろうとするが

「待ちなさい比企谷くん、ごまかされないわよ？きちんと説明を要求
するわ、時間はたっぷりあるからね？」

「俺には俺の帰りを待つ小町がいるんだ！命だけ」「小町ちゃんに連絡
しといたから」そんなご無体な・・・

結局3人に囲まれてサイゼリヤでおさらされる比企谷だった。

そして今日、比企谷は遅れて奉仕部へ行つた、今日は海老名が力作
？の感想を聞きたいと同人誌を持ち込むことになつっていたからだ。

内容が簡単に想像ができるため本当は休みたかつたが雪ノ下が怖
い為適当に用事を作つて遅れていくことにしたのだった。

「海老名さんの奴つてあれだろ、葉山とからむアレ、あんなの雪ノ下が
見たら卒倒するんじゃないかな？」

そうブツブツいいつつ部室へ顔をだすと誰もいなかつた。

「あるえ？」

まあいかといつもの場所に座つていると材木座からメールが来
る

『超凄いプロットを考えた、戸塚殿へ話したら感激していたぞ！一緒に
ストーリーを考えてくれるそうだから今からそつちに行く』

比企谷は速効で材木座へ電話をする

『今すぐダッシュでこい！あ、戸塚には絶対無理はさせないように必ず連れてくること、無理させたらお前を蒸発させてやるからな』

『おぬし矛盾しすぎだろう』

しばらくするとノックの音が聞こえる

「戸塚！来ててくれたか！」

そう言って扉を開けると葉山が立っていた

「ちょっと失礼するよ、戸塚君も来るのかい？」

「今すぐ帰れ」

会いたくない顔が出たので扉を閉めようとすると

「つれないね、まあ俺も来たくは無かつたんだけど雪ノ下さんに用があつてね、メールしても無視されるからこうやって来たんだよ、用が済んだら帰るから」

そう葉山は言うと強引に部室に入ってくる

「あれ？いないね？」

「俺も知らん、用が済んだら帰れよ」

そう言いうと椅子に座るが、すぐ戸塚と材木座が現れて比企谷は主に戸塚のおかげで上機嫌になつた。

「やっぱ戸塚は最高だなあ、戸塚俺の嫁になつてくれ、いや婿の方がいいな、俺は専業主婦で」

「んもう八幡は冗談ばっかり」

ハイテンションになつている比企谷を見てドン引きする材木座と葉山だつたが唐突にバーンと扉が開く音が聞こえる。

「そんなことはさせないわ！」

4人がドアの方を向くとお面を被つた雪ノ下由比ヶ浜一色らしい人たちが入ってきた。

「・・・お前ら何やつてんの？」

呆れ顔の比企谷に

「私たちは総武高校の平和と比企谷くんの貞操を守るために結成された総武戦隊！奉仕レンジャー！」

雪ノ下らしき人物はそう言うとビシツとポーズをとる

「・・・は？貞操？おまえ雪ノ下だよな？そのお面どうしたの？つてい

うか何してんの？」

比企谷は呆れ顔になるが

「雪ノ下？違うわ！私はゆきのんレッド！」

「私はガハマブルーだよ！」

「いろはすイエローです！」

「「「三人そろつて総武戦隊奉仕レンジャー!!!」「」」

背後でドカーンと爆発がしそうな口上を述べるとまたもポーズをとる

比企谷は葉山の腕を取ると教室の隅っこに連れて行き

「おい、お前の幼馴染と友だちと部活のマネージャーがおかしいことになつてんぞ！さつさと止めてこい！」

比企谷はそういうて葉山をけしかけようとするが
「嫌だよ、だいたい彼女らぶつちやけ君と友達以上の関係だろ！君が何とかしろよ」

そう言うと葉山はゆきのんレッドの前に比企谷を押そうとするが
「なにいきなりそんな恥ずかしいこと言つてるんだ？、大体関係性以前に貞操とか物騒なこと言つてる連中の前になんていきたくねえ！」
「美少女3人に貞操守つてもらえるなんて君はとても幸せな奴だな！
うわーすつごく羨ましー」

「葉山、おまえキヤラぶつ壊れてんぞ！」

一人がワイヤワイヤ揉めていると

「やはりこの書物のとおりのようね・・・」

ゆきのんレッドと名乗った女子は一冊の薄い本を取り出す

「エビナヒナが書きしこの予言書によるとザイハチ、トツハチを経てハチハヤが完成するという、そしてその前触れとしてかならずパートナー同士で揉めると書いてあるわ」

「おい！なんか変なこと言つてるぞ！エビナヒナつて海老名さんだろ！葉山！」

「俺知らない、なーんもしらない」

葉山は後ろを向いてしゃがみ込む

「愚腐腐腐腐腐腐腐、ヒキタニくん、ハチハヤはまだ早いよ、まずはザ

イハチでしょ？」

海老名がニヤニヤしながらいつの間にか登場する

「海老名さん、一体なにやつたの？」

「んー？君が来る前に私の書いた同人誌読ませて君たち4人の関係を熱弁したらこうなつちやつた、ヒキタニくん愛されてるねー」

「誰にどう愛されてるんだよ・・・勘弁してくれ・・・」

「決まってるでしょ、そこの3人の男衆によ！突いて突かれて突かれて突いて！キマシタワー！」

海老名は鼻から噴水のごとく鼻血を吹き出す。

「そんなことはさせないわ！ガハマブルー！出番よ！」

「ゆきのん！じゃなかつたゆきのんレッド！まつかせて！」

そう言つて手を上げると由比ヶ浜？がポケットから包み紙を取り出し材木座へと近づく

「はえ？」

怪訝な顔をしている材木座にガハマブルーが近づき

「中二？これプレゼント、全部食べて？」

と何か石炭のような黒ずんだ物を材木座の口に押し付ける

「ム、むがー」

必死に抵抗する材木座だつたが

「中二？誰にでもこういうことするわけじゃないんだよ？」

とガハマブルーはお面を外して耳元でささやくように言う

「どつきーん、食べる食べる食べるでーじやる!!」

メロメロになつた材木座は石炭のようなものを全部平らげると

「こ、これは！」

と言い残してばつたりと倒れる

「ざ、材木座ー!!」

「次はトツカサイカ！あなたよ！」

「え？僕？」

「戸塚に変なもん食わせんじゃねえ！」

比企谷は戸塚の前に立ちふさがるが

「次はいろはすイエローあなたの出番よ」

「はーい、戸塚先輩、テニス部について生徒会から耳寄りな情報がある
んですよー聞きたくないですかー?」

「・・・八幡、『めん』」

そう言うと戸塚は比企谷を押しのけいろはすイエローの元へ駆け
寄る

「え? 部費が~%アップ? 練習場所も・・・? グラウンドの使用権
が・・・」

「と、戸塚・・・」

比企谷は戸塚の近くに寄るが

「ごめん八幡、僕部活も大事だからさ・・・」

戸塚はそう言うと部室を出て行ってしまった

「と、戸塚ー!」

「残つたのはあなたよ! ハヤマハヤト! このゆきのんレッドがアイ・
キドウでコテンパにしてやるから覚悟なさい!」

そういうとフンスと葉山の前に立つ雪ノ下

「なんでこんな目に・・・ちょっと用事があつただけなのに・・・」

しゃがみ込んで立ち上がるうとしない葉山に今更ながら比企谷が
聞く

「おうそうだ、そう言えば雪ノ下に伝言があつたんだろ? 雪ノ下も
メールぐらい見てやれよ」

「こんな男のメールなんて見たくも・・・ハツな、なんのことかしら?
私はゆきのんレッドよ!」

「もういいから、葉山伝言をどうぞ」

「陽乃さんが・・・」

葉山がぼそぼそと話し始めるがよく聞こえない

「んあ? なんだつて? もつと大きい声で!」

「だから陽乃さんが暇だからつて遊びに来るつていつてたの!、君た
ちに前もつて伝えておこうとしたの! もう言つたから俺は帰る! ん
じやそういうことで!」

そういうと葉山は逃げるよう扉を開けるが、すべては遅かつた
「あれー隼人、どこに行くのかなー?」

「陽乃さん……」

「げえ！おい葉山言うのがおせえんだよ！」

「げえつてどういうことかなー未来の義姉ちゃんに失礼じゃないかな？んーそれとも私と一緒になつて義妹ができた方がうれしいかな？」

そういうと陽乃是比企谷へと抱き着く

「ちよつとやめてくださいよ、みんなみてますよ」

「ふーん見てなかつたらいいんだ？ねえ雪乃ちゃん……つて雪乃ちゃんもガハマちゃんもなにやつてるの？」

お面をつけてる雪ノ下と由比ヶ浜を一色、傍から見ると異様な光景である

「雪乃？違うわ私はゆきのんレッド！」

「ガハマブルー」

「いろはすイエロー」

「「三人そろつて総武戦隊奉仕レンジャー」「」

「……雪乃ちゃん大丈夫？」

「私たちは総武高校の平和と比企谷くんの貞操を守るために結成された総武戦隊奉仕レンジャー！魔王ハルノ！あなたに比企谷くんは渡さないわ！」

「……あ、そういうことか」

と何か納得したような陽乃

「ふふふふ、そう私は魔王陽乃！ゆきのんレッドの頭脳とガハマブルーのスタイル、いろはすイエローの計算高さを兼ね備え美貌においては3人以上、さあ比企谷くん、私に貞操をささげなさい、そして私と逃避行しましょう」

陽乃是そう言うと比企谷の手を引っ張る

「ちよつちよつと陽乃さん？」

引っ張られるがままに比企谷はそのまま連れ出されてしまう

「魔王ハルノ！まちなさい！」

そういうと3人はどたどたと比企谷を連れた陽乃を追いかけてい

く

「一体何が何やら……」

海老名もいつのまにかいなくなつてゐる為取り残される葉山
何気に窓の外を見るとハイエースが止まつてゐる

なんとなくそのハイエースを見ていると、比企谷が簗巻きにされて
担ぎ込まれるところだつた。

「雪乃ちゃんと結衣といろはが比企谷を担ぎ込んでるのか？あ、運転
席に陽乃さんが乗つたな・・・皆で結託したのか・・・」

そのままブーンと走り出すハイエースを見ながら

「まあみんな得してゐからなにも問題ない！なにしろ俺はみんなの葉
山隼人だからな！だから目下のところは彼を保健室に連れて行くこ
と！これはとても重要だ！比企谷はきっと大丈夫だろ！」

そう言うと口から泡を吹いて床に転がつてゐる材木座を保健室に
つれていく

「今日のことは忘れた方がいいな！うん！俺は何も見なかつた！そう
いうことだ！」

今日のことは葉山の中ではなかつたことになつたらしい

だから次の日から比企谷がものすごく憔悴しきつた感じで毎日登
校することになつていても、雪ノ下姉妹と由比ヶ浜と一色ががやけに
つやつやした感じでいても彼の中では何も問題は無いのであつた。